小学校高学年の部

最優秀賞

はじめてのプレゼント

つくば市立栄（さかえ）小学校　五年　阿久津（あくつ）　こころ

〝名前は宝物〟という言葉が、忘れられない。

「おばあちゃんの名前も、おばあちゃんのお父さんが付けてくれたのよ。」

「えっ。わたしのひいおじいちゃん？会ったことない。」

「そうだね。おばあちゃんも、お父さんに会ったことないのよ。」

「どうして…。」

すると、祖母は引き出しから小さな写真を出してきて、見せてくれた。

「これが、こころのひいおじいちゃん。おばあちゃんが、まだ、お母さんのお腹の中にいた時にね、お父さんは戦争に行ってしまったの。生まれた時も、戦地の中国にいたから、会えなかったの。」

その白黒写真の中のひいおじいちゃんは、笑っていなくて、戦争の服を着て、帽子をかぶり、真っ直ぐ前を向いている。

「この写真はね、おばあちゃんの宝物。お父さんは戦争で亡くなったから、こころのように、お父さんと話すことも、抱っこさえもしてもらえなかったけれど、戦地から届いた手紙にね、お父さんが付けてくれた名前が書かれていたんだよ。だからね、おばあちゃんにとって名前は、お父さんからもらった、最初で最後のプレゼント。大切な宝物なんだよ。」

わたしの胸が、ぎゅうっとなった。

ひいおじいちゃんは、どんな思いで、戦地で子どもの顔を思い浮かべ、名前を考えたのだろう。一目、会うことさえも出来なかったなんて、信じられない。残されたひいおばあちゃんの悲しみ、いろんな気持ちが、頭の中に、次から次へと出てきた。

そして、考えれば考えるほど、今のわたしは、どれだけ幸せで、守られているのかを、思い知らされる。名前も、誰だって、生まれたら付けてもらえるものだから、深く考えたことなんてない。祖母の時代を思うと、名前も、普段こうして父や母がしてくれていることも、あたりまえだと思ってはいけない。そう初めて気が付いた。今、わたしは、祖母が言った「名前は宝物」という言葉を、心の中で、何度も何度も繰り返している。

「おばあちゃんはね、悲しい事があった時、それに、嬉しい事があった時も、いつも自分の名前にこめられた想いを思ってみるのよ。天国のお父さんと、お話し出来ているような気がしてね…。」

おばあちゃんの気持ちに触れて、わたしは涙が止まらなくな

った。会ったことのない写真の中のひいおじいちゃんを、わたしも近くに感じる。そして、こうしてたくさんの事を話してくれる祖母の顔は、いつだって、強さと優しさであふれている。わたしも、そんな大人になりたい。

朝、学校で挨拶する時、わたしは友達の名前を言うようにしている。同じ「おはよう」でも、「〇〇ちゃん、おはよう」と言うと、ぜんぜん違うのだ。わたしもまた「こころ、おはよう」と言われると、それだけで、二倍も三倍もうれしくなる。

それはきっと、名前には大切な想いや願いがこめられているからだと思う。そんなふうに、深く感じられるようになった。

名前は、生まれてはじめてのプレゼント。そして誰もが持っている、最高の宝物。

わたしの名前は、こころ。名前のように、人に心を伝えられる、大人に成長していきたい。